資料紹介

『樺太・薩哈嗹〈サガレン〉（北樺太）絵葉書アルバム帳』からみるサハリン島の景観

松山　紘章（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　博士後期課程）

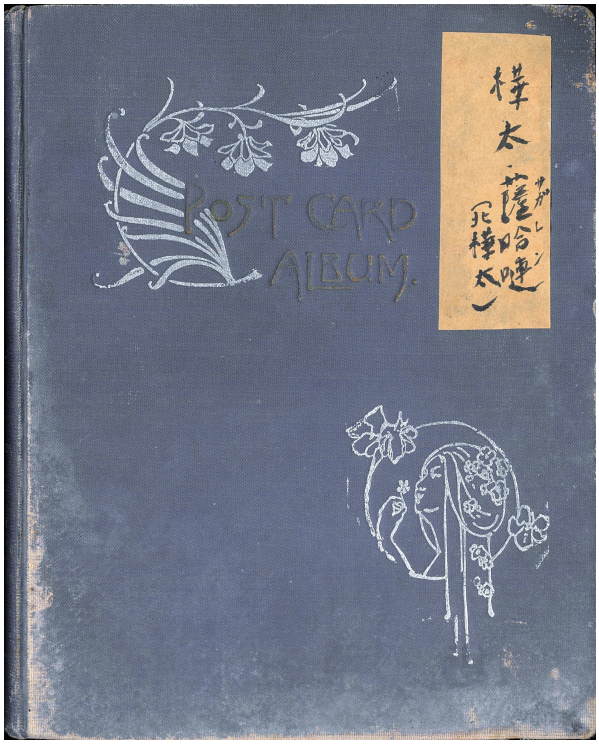


写真　『樺太・薩哈嗹〈サガレン〉（北樺太）絵葉書アルバム帳』

はじめに

本稿では神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター所蔵の『樺太・薩哈嗹〈サガレン〉（北樺太）絵葉書アルバム帳』（以下絵葉書アルバムと略す）を紹介したい。

絵葉書アルバムにはサハリン島の日本領樺太と1920年に起きた尼港事件を理由に、日本の軍政が敷かれて保障占領下となった北緯50度線以北の北樺太の絵葉書が蒐集されている。また、沿海州にあるニコラエフスク（尼港、以下尼港と略す）の絵葉書が1枚含まれていた。絵葉書アルバムには89枚の絵葉書が蒐集されていた。絵葉書アルバムのかつての所蔵者や蒐集者の具体的な情報はない。しかし、絵葉書の1枚には、個人名とみられる蔵書印があった。絵葉書アルバムの由来を知る手掛りになるかもしれない。絵葉書アルバムの状態や絵葉書の記念スタンプの押印時期から蒐集者がサハリン島を旅行して集めたと推察される。

近年、絵葉書は歴史研究の資料として価値が高まりつつある。京都大学貴重資料デジタルアーカイブの「絵葉書からみるアジア」の中では、「樺太／サハリン」の項目で絵葉書が公開されている[1]。また、二松啓紀が大日本帝国下の樺太について絵葉書を分析して述べている[2]。このように絵葉書は資料が限られているサハリン樺太史研究にも活用が可能なことを示している。

今回絵葉書アルバムの紹介を通して、同じ島である日本領樺太と一時期日本の軍政が敷かれた北樺太の景観や社会が視覚的にも異なることを提示したい。

本稿は便宜上、サハリン島の二つの地域の位置を分かりやすくするため日本領樺太を南樺太、北緯50度線以北を北樺太とする。また、北樺太の中心地アレクサンドロフスクは当時の日本名の呼称である亜港とし、島の全体を表わす場合はサハリン島とした。

1. 絵葉書アルバムの概要

絵葉書アルバムには南樺太の絵葉書が重複を含めて65枚、北樺太が23枚、沿海州尼港の絵葉書1枚が蒐集されている。南樺太の絵葉書は記念スタンプの押印時期や絵葉書の1枚に「大正2年」と蒐集者が書いたと思われるメモを確認したので、1910年代から20年代以降の販売と推定される。北樺太の絵葉書は蒐集時期が明確に分かる記念スタンプはないが、景観や一部確認できた発行元から、保障占領開始後の1920年以後とみられる。

また、絵葉書アルバムに蒐集された絵葉書のうちモノクロは72枚、着色（カラー）が12枚である。さらに北樺太の絵葉書には白と青の二色刷りが5枚あった。

絵葉書の発行元は、順不同に江口商店、近江堂若林書店、大泊鶴岡商店、樺太出品協會、平和記念東京博覧會樺太出品協會（樺太出品協會と同一と思われる）、樺太廳、樺太廳拓殖部、薩哈嗹州派遣軍司令部、鶴岡商店、野田寒写真館、文樺堂、北進堂、北進堂書店、山形屋、若林書店である。そのうち、発行元が南樺太と分かるのは樺太廳関連の他には若林書店や北進堂、大泊鶴岡商店、野田寒写真館などである。北樺太の発行元で確認ができたのは薩哈嗹州派遣軍司令部であった[3]。北樺太の絵葉書の中にはロシア語で「II. Александровскъ　O Сахалинъ」（筆者訳：アレクサンドロフスク　サハ

リンについて）が表題に印字されていた。また、日本語の表題が付く絵葉書には「Sagalen Arikisandoru」（サガレン　アレクサンドル）と亜港のロシア名を英語で表記していた。したがって、ロシア語、英語と複数言語であるのは販売対象者にロシア人が含まれていたようだ。

絵葉書に写された景観の内訳は次の通りである。南樺太の絵葉書から撮影地が判明したのは 44 枚であった。最多は豊原の 17 枚、大泊 11 枚、真岡 6 枚、本斗と海豹島 2 枚、野田、泊居、栄浜、安別、熊笹峠、能登呂岬は各 1 枚ある。その他の絵葉書の景観は、残留ロシア人、ロシア正教の教会や神社、鰊漁や林業・パルプ業、養狐業、農業、海岸に着岸した氷塊などを写していた。絵葉書には表題が無いものもあった。それらは景観や建造物から南樺太と断定できるが場所の特定はできない。

北樺太の絵葉書は、筆者の分類では亜港の街と分かるのが 9 枚、日本軍又は薩哈嗹州派遣軍と推定される 4 枚、鉄道隊 5 枚、海岸 2 枚、漁業 1 枚、灯台 1 枚、国籍の判明できなかった軍艦の絵葉書が 1 枚であった。

最後に北樺太ではないが尼港の「（薩哈嗹消息）尼港守備隊表門」と題する絵葉書が 1 枚である。

以上が絵葉書アルバムの概要である。蒐集者は当時の街の景観や産業、社会の様子が分かる絵葉書を集めていた。

2. 絵葉書に写された南樺太と北樺太の景観

それでは、絵葉書アルバムにある南樺太と北樺太の絵葉書をいくつか紹介したい。

南樺太の絵葉書は、大別すると風景と産業の景観である。絵葉書 1 は「（樺太風景）大泊榮町大通り」である。大泊の榮町大通りを写し、道路両側には様々な商店が立ち並び背広姿の男性や浴衣で歩く人々がいる。樺太の中心地・豊原だけでなく、主要な市街地も発展して賑わっていた。

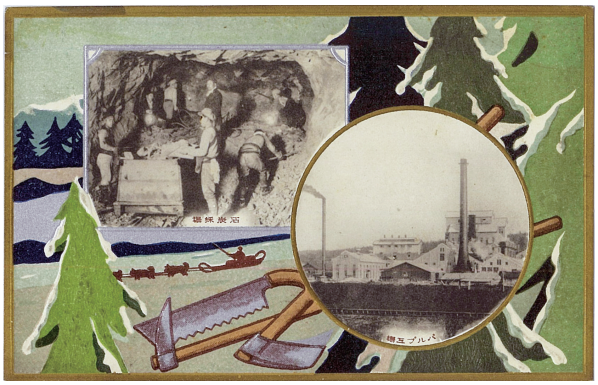
絵葉書 2 は「樺太鰊ノ大漁」である。大量の鰊を前にして漁師などの漁業関係者と思われる男性 6 名が見つめている。そのあまりの多さに圧倒された様子である。絵葉書から南樺太が鰊の宝庫を極めていたことが分かる。

絵葉書 3 は「石炭採掘」と「パルプ工場」と表題が付いている。樺太庁が発行者のためか主要産業を意識した構図である。余白となる背景には、鋸や斧の道具、犬橇を操る人の姿を描き樺太の自然が産業を生み出した印象を与えている。

次に北樺太の絵葉書は亜港の風景と軍事関係（軍人や鉄道隊等）に分けられる。

絵葉書 4 の絵葉書は亜港の街であるが、先述した日本語ではなくロシア語の表題が左上にある。絵葉書の右側建物前に多数の軍人と見られる人物が集まっている。

絵葉書1　「（樺太風景）大泊榮町大通り」



絵葉書3　「石炭採掘」と「パルプ工場」

絵葉書2　「樺太鰊ノ大漁」

絵葉書4　「II. Александровскъ О Сахалинъ」

絵葉書5 「II. Александровскъ О Сахалинъ」

絵葉書6 「Sagalen Arikisandoru（亞港）鐵道隊材料廠」

この絵葉書から南樺太と北樺太を比較すると建物や道路など景観が全く異なっていたと理解できる。また、絵葉書５も亜港と思われるが同じことがいえる。

絵葉書６は「(亞港）鐵道隊材料廠」との表題である。北樺太では保障占領が始まり交通機関の必要性が生じた。そのため、日本軍の鉄道隊が亜港からデルビンスコエに軍用軽便鉄道の敷設工事を行った[4]。絵葉書右側の天幕に日の丸とともに鉄道隊材料廠の看板が見える。天幕の側には軍人が７名おり、その左隣に丸太や角材がある。北樺太での軍用軽便鉄道建設について、材料廠は天幕、周辺に丸太や角材が無造作とも思える置き方の状況から急いで工事が進められていた様子がうかがえる。

絵葉書アルバムにある絵葉書の一部を紹介した。南樺太は「日本化」が進み、北樺太側は日本の軍政下でもロシアらしい景観であった。絵葉書からもサハリン島はひとつの島でありながら、国境を隔てると全く違う景観である。

おわりに

以上、絵葉書アルバムから南樺太と北樺太が同じ島でも明らかに異なる景観であった。本稿では絵葉書アルバムの概要と一例として絵葉書６枚を紹介したのにすぎない。今後の課題は各絵葉書の景観や人物、建築物、農具や漁具など様々な被写体の詳細な分析作業を進めることである。

一方で、筆者が絵葉書アルバムを調査して気付いたことがあった。それは絵葉書アルバムの留意点といえる。主に南樺太の絵葉書は豊原・大泊など主要な市街地や漁業・パルプ業などの産業、その他にも様々な景観がある。北樺太の絵葉書は主に中心地・亜港の街並みと軍事関係が蒐集されていた。そこから南樺太は観光土産用で発行した絵葉書、北樺太は観光土産用と保障占領の状況を伝えるニュース性のある絵葉書といえよう[5]。そのような中で、例えばサハリン島の先住民族を写した絵葉書は北樺太に１枚のみである。また、南樺太の市街地以外の集落の景観は樺太庁発行の「漁村」と印字した絵葉書しかない[6]。北樺太では亜港の日本人社会を写した絵葉書はなかった。したがって、絵葉書の集め方には、やや偏りの傾向がある。そのため、絵葉書アルバムが当時の南樺太と北樺太の景観や社会を厳密に表しているとは言い難い。つまり、絵葉書は蒐集者の何かしらの意図や考えが入っている。そのことを前提に研究資料として取り扱い、分析を行う必要性があるだろう。しかしこの絵葉書アルバムは、南樺太、北樺太、1920 年代のサハリン島全体の三つの歴史を解明する貴重な基礎資料に変わりはない。

【注】

1 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/

2 二松啓紀『カラー版　絵はがきの大日本帝国』（平凡社新書 888、平凡社、2018 年）。

3 絵葉書アルバムに「亜港繪葉書其一　高村商店發行」とあるタトウ（畳紙）が挟まれていた。タトウ（畳紙）とは、絵葉書を包む袋のことである。

4 三木理史「幻の日本によるサハリン島一島支配―保障占領期南・北樺太の開発―」（『歴史と地理第 682 号　日本史の研究（248）』）山川出版社、2015 年、1-17 頁。

5 田中傑「史料としての写真絵葉書」（『非文字資料研究　News Letter』）No. 21、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター、2009 年、19-23 頁。

6 絵葉書の撮影地に栄浜や安別もあるが、栄浜は磯馴松（そなれまつ）、安別は北樺太へ派遣する海軍の砕氷船を写しているため集落の景観ではない。

【参考文献】

加藤洌「北樺太　アレキサンドルフスク～デルビンスコエ間の軍用軽便鉄道」（『鉄道ジャーナル』第 34 巻第 12 号、2000 年、123-126 頁）。

沖田信悦『植民地時代の古本屋たち　樺太・朝鮮・台湾・満洲・中華民国―空白の庶民史』（寿郎社、2007 年）。

太田篠吉『サガレン案内：従軍中の視察記　附・尼港の悲惨事』（豊文堂出版部、1923 年）（国立国会図書館デジタルコレクション　アクセス日付 2022 年 2 月 12 日）。

佐藤健二『風景の生産・風景の解放　メディアのアルケオロジー』（講談社選書メチエ 5、講談社、1994 年）。

竹野学「保障占領下北樺太における日本人の活動（1920～1925）」（『經濟學研究』第 62 巻第 3 号、北海道大学大学院経済学研究科、2013 年、31-48 頁）。

渡邊一『母・亜港　―北樺太に渡った母たちの半生記―』（サッポロ堂書店、1991 年）。